

研究結果報告書

所属 東北師範大学
役職 講師
氏名 常 思佳

研究結果

研究テーマ：日本浪漫派と満州浪漫派の間における川端康成の文筆活動

報告者は、川端康成について、特にその小説や評論などに内在する〈詩的精神〉の諸相を考察している。「『浅草紅団』をめぐる「舞台の詩」—ジャン・コクトー『エッフェル塔の花嫁花婿』（1921）を手がかりに」（『比較文学』第61号）では、第一次世界大戦後に流行した前衛芸術を踏まえ、小説の筋と劇的な「ポエジー」との関係进行分析した。本プロジェクトではその成果を踏まえ、日本文芸と交錯する〈詩的精神〉のありようを注目した。

戦間期における川端の文筆活動は、〈浅草もの〉や〈実録もの〉といったモダニズムの作風から、『雪国』を代表とする、日本文化への回帰の傾向が認められる。なかでも、「末期の眼」や「純粹の声」などの随筆や評論における〈詩的なもの〉の変遷と、その後の満洲訪問から生まれた作品群とに接続を見出し、日本人の外地移住に伴う、他の民族文化との接触・連帯・葛藤を孕んでいるものを考察した。結果、以下の二点が明らかになった。

第一に、川端の満洲訪問、特に現地作家との交流・編集活動の経緯をほぼ明らかにした。満洲滞在中の川端は、日系作家の現状、満洲の出版文化、日満間の文芸動向を把握し、『満洲国各民族創作選集』の内地への出版を斡旋した。また、文学賞の審査員として、満洲や蒙疆の各民族の文芸作品を日本文壇に推薦し、異文化の融合と多文化の共生に関する活動を行っていたが、そこには帝国日本の文化統治者としてのまなざしが交差している。

第二に、北村謙次郎『春聯』の推薦文と川端自身の連載小説『東海道』を照合させることで、歴史記述の前提に、ロマンチックな想像力を込めた語り、いわゆる歴史に向かう詩的なものがあることを確認できた。ここには、戦時下の言説における日本浪漫派と満洲浪漫派との連続性がみられ、同時代の「近代の超克」を敷衍した川端の戦中・戦後の文学的な営為の特徴が明らかになる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 1、題名：戦時下の満洲における川端康成の文化活動
発表者：常思佳
会議名：吉林省比較文学会
時期：2023年8月
場所：延辺大学
- 2、題名：川端康成「東海道」考察
発表者：常思佳
会議名：中国外国文学学会日本文学研究分会
時期：2023年10月
場所：深圳大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- 1、題名：昭和日本の“文壇政治家”——川端康成の文化活動考辨
発表者：常思佳
論文掲載誌：外国文学評論
掲載時期：2022年5月 第2号
- 2、題名：戦時下の満洲における川端康成の文筆活動
発表者：常思佳
論文掲載誌：日本近代文学会北海道支部会報
掲載時期：2023年5月 第26号

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)